

次 目

聖 語

法華經の信解(其七)……………日生上人

日什正師諷誦章講話……………梶木顯正

○團 報

○寄附團費誌料領收

第三十八年二月號



統

法財人團  
統  
一團發行



## 聖 語

本より學文し候し事は、佛教をきはめて佛になり、思ある人をもたすけんと思ふ。佛になる道は必ず身命をすつるほどの事ありてこそ、佛にはなり候らめこそをしはからる。既に經文のごとく、惡口罵詈刀杖瓦礫數數見擯出と説れて、かゝるめに値候こそ法華經をよむにて候らめと、いよく信心もおこり後生もたのもしく候。死して候はば必ず各々をもたすけたてまつるべし。——日蓮は日本國東夷東條安房國海邊の旃陀羅が子也。いたづらにくちん身を、法華經の御故に捨まいらせん事あに石に金をかふるにあらずや。

(佐渡御勅氣鈔 繪扇七〇一)



統一會館御寶前



## 法華經の信解（其七）

日生上人

妙法々々と言つても何を指して居るのか、第一にそれからして抑へ所がわかつて居ないだらう、何か魔法遣ひみたいなものがあつて、妙法不思議な事をやるナンといふやうに考へて居る、そんな譯のものではない。この妙法の「法」といふことは、即ち前に申した三つの事なのである、「妙」とは讃める言葉であつて、何とも申し様のない尊いことであるから妙といふ字が附いて居るのである、何がそれ程尊いのかと言へば、法が尊い、故に「妙法」といふのである。「蓮華」といふのはその法の尊さを譬を擧げてわかり易くしたものである、「經」とはその事柄を書き記した書物である、聲佛事を作り、文字に寫して經卷を作すといふので、その事柄の話をしたことである。だから正味の所は「法」といふ一字であるその法が「妙」である、譬へば「蓮華」の如くである、さうしてその事に關する話が「經」になつて居るのであるから「妙法蓮華經」といふ五つの文字でも、正味の所はたゞ一つ「法」といふ字にあるのである。

その法とは何ぞや、それが今申す三つの事柄であつて、即ち心法、衆生法、佛法といふことになるの



で、これを三法と申して居る。その三つの方が一つになつて、前に言ふ通りどちらから研究して行つても最後は一つになる、その玄々微妙の關係に於いてそれが妙法といふ名に現れて來るのである。だから法華經の實質はこの三つの法といふものにある、心法といふのは吾々人間の心である、心といふのは、人間の本質本体を謂へて行けばどうしても心が主である、だから心法とは人身觀を言ふのである。それから衆生法といふことは、澤山の生きとし生けるもの、やうであるけれども、これは天地宇宙の一切を仰へて申すのである、その宇宙の中にはやはり生きて居るものが主であるから、人間にとつて言へば心法宇宙にとつて言へば衆生法である。佛教は生命の方を主にするから、人間は身と心で出来て居ると言つても、往いて考へれば身は心の附屬物である、心を以つて自己とするので身は心に附いて居る附屬物である。貝に譬へたならば貝殻みたいなものである、心の方が主ナンである。であるから心法と申せば人間のことである。宇宙もやはり生命を有する衆生法が主であるから、これを諸法と言はずして衆生法といふのである、擴げて申せば諸法で宜しいのであるけれども、衆生法と言ふ。さうしてその宇宙の中には悟を開いて居るところの絶對者がある、これを佛法と申すのである。

だから妙法と言つても結局は人間と、宇宙の衆生と、佛と、それを言ふのである、人間を離れ、衆生を離れ、佛を離れて他にナニも法といふものが存するのではない。この三つのもの、本質と、この三つのもの、互に關係する有様、働く有様、そこに於いて妙法といふ名が現れて來るのである、そこをハッキリ抑へて置かなければいけない。法華經と言つたらたゞ紙に字が書いてある、それで妙法ぢや妙法ぢや……紙の字と譯のわからぬ妙法論とで跳ねたり飛んだりして居るのが今日一般の法華信者と稱するものである。ドンドコ〜「妙法ぢや〜」妙法とは何だ「何だといふことがあるか何でも妙法ぢや」……さういふことになつて實に譯がわからぬものになつて居る。だから少くとも法とは心法、衆生法、佛法の三つであつて、それが互に關係する上に、それが働く上に玄々微妙、何とも言ひようの無い尊さを有つ點に於いて、妙法といふ言葉が現れて來る、斯ういふことを第一着に心得なければ法華經の本質といふものには入つて行かない譯である。

そこで只今申した人身觀、宇宙觀、佛陀觀といふこの三つの意味合を能く考へて、その三つが互に相關聯して往いては一つになる所を抑へなければ、法華經の本質がわかつたとは言へないのである。それで今日は成べく平易簡明に、法華經の本質を了解し得るやうにお話して見たいと思ふ、申述べたい事は澤山あるけれども、その中の大事な點を纏りを附けて話して置きたい。

最初に人身觀、すなはち吾々人間に就いて考へて行く順序はどうかといふと、先づこの人間の靈魂である、それが始め無く終り無く續くといふ時間の實在、これが第一に考へなければならぬことである。この靈魂は何時始まつたといふものでなく、何時終りを告げるといふものではない、それはどういふ意味になるかといふと、神様に拵へて貰つたものでもなく、他から奪取られる事も無い。貸して貰つた



ものならば、返せと言はれ、ばただ取られてしまはなければならぬが、さういふものではない。又或る物と或る物とがひつゞき合せてその間に出来て来た抽象的なもの、例へば機械なら機械が動いて摺合ふからガチャ／＼といふ音になる、機械が動かなければガチャ／＼といふ音は出ない、それと同じやうに靈魂といふものも或る物と或る物との接觸の間に動いて居るといふやうな議論もあるが、さういふ從屬性の存在ではない。若しさういふものならば、その機械が動かなくなれば音は止まつてしまふ、或る物と或る物との動きに依つて生じて居るやうな、さういふ從屬性の無常性のもではない。何ものにも先つて存在し、何もの、終りよりも尙その後、實際無く後際無しと言つて、心よりも先にあるといふものは無い、心が無くなつた後に尙ほ存在するといふものは一つも無い、人間の靈魂は何ものよりも先に、さうして何ものよりも後に存在するものである、斯ういふことが佛教の思想の根本である法華經に於てはそこを最も強く打込んで居るから、どんなえらい者でも、お前の靈魂よりも先に居つてそれが斯うである、あゝであるといふやうな話になつたならば、絶対に受け付けないのである、そこが大なる事な所である。

先づ左様に時間上の存在としての始め無く終り無く、何ものにも從屬せざる獨立的存在として靈魂を考へて行く、それが即ち一念三千と言ひ、それが即ち心法妙といふので、我が心の妙は何ものにも侵されぬものである。これが神様に拵へて貰つたもので、終ひにはたゞ返せといふやうなことになるれば、

何にも妙ではない、借物である、洵に粗末なものになつてしまふ、さういふものではない。又靈魂が物質的のものであつて、物質の精巧なる運動に依つてそこに心のやうな働きが生ずる、ちやうど時計の螺旋仕掛で動いて居るやうなもので、時計には何の靈魂も無い、人間の心の動きも時計の螺旋のモットモット進歩したやうなもので、悲しいとか嬉しいとか、憎いとか可愛いかいふやうな事も考へたりするけれども、それは結局やはり時計のゴットン／＼といふ音の發達したものである、その機械が止まればそこには何とも無いのだといふ風に、この人間の精神作用を物に從屬したものと考へるところの科學的知識などには、絶対に反對の立場を有つものである。左様に我が精神を侮辱するやうな、從屬性の存在として考へるやうなことはどこまでも許さぬといふことを、哲學上の思想から根據強く打込んで行くのが法華經の精神である。

法華經を信すると言ひながら、自分の靈魂はどうなるかわからぬといふやうなことを申す人が澤山ある、お婆さんなどで、信心はして居るけれども靈魂は消えて無くなるのかも知れない、「若しも靈魂があつて青鬼に取捕つたら大變だ」といふやうなことを考へたり、或は又「自分は佛様に成るなどといふことは餘り勿体な過ぎますから、どこか極樂の隅の方へでも置いて戴きたいと思ひます」といふやうな遠慮した事を言うて見たり、さういふことは洵に素人臭い。素人臭いといふものは本當の信解が無いのである、やはり一つの型にキチンと嵌つて來るやうになるには、佛の教を能く聽聞し從順に信解するから



して、無學の人の話でもちやんと教の正義に當嵌るやうになる。變な事を言ふなど思はれる者は駄目ナ  
ンである、昔のえらい學者がその事を言うて居る、ハテナと吾々が思ふ位な者は、佛様の眼から見たら  
「危ぶない〜」といふことになるだらうといふことが言はれて居るが、私はその點が氣懸りで仕方が  
ない。「法華經の教などはさう深く聴かなくても宜しい、信心さへして居つたら宜しい」といふやうな議論  
が多いけれども、やはり本當に能く聴かして置かないと、その信解といふものは危ぶまないものである。  
危ぶないといふのは、今言ふ大事な靈魂の實在さへもフラ〜して来る、餘程わかつたやうな顔をして  
居る信者でも、法華經の大事な教義に矛盾するやうなことを、平氣で言ふ人がある、それは實に恐しい  
弊害である。而もその人は法華經を自分では遵奉して居ると考へて居る、日蓮聖人をして言はしむるな  
らば、法華經を信するに似て心は外道に陥つて居るものである、自分では信心すと思ふとも、その心得  
は信仰になつて居ないといふことがある、「信すと雖も而も信ぜざる者なり」で、本人は信じたつもりで  
も、教の方から言へば寧ろ背いて居る。自分では車に乗つたつもりでも、隻脚外して居るものであるか  
ら電信柱に衝つかつて引繰返へるやうなことになる、それは乗り様が悪いので、自分はちやんと乗つ  
たつもりで居るけれどもさうでなかつた、斯ういふ點が澤山あるやうに思ふ。

であるから人身觀に就いては、第一に生命の存續といふことは何よりも先に強く信じて置かなければ  
ならぬ。それから臨終の刹那に臨んでは、「坊さんは靈魂があると云ふけれどもさうでないかも知れぬ、  
さうでなかつた時はどうしようか、消えるのかも知れぬ、消えたらどうしようか、斯ういふやうな  
ことを考へてフラ〜して「ア、モウ聴きなほす餘裕もない、どうしたら宜からう」……そんな事では  
いけない。早く健全なる信解を打立て、その信解は天地を貫いて、一切のものは無くなつても我がこ  
の生命は輝き渡るものである、太陽が地に落ちるやうなことがあらうとも、我が心の光は隠れるといふ  
やうなことは斷じてないといふ、それ程強い意思と觀念を以つて貫くのが信金剛の如しといふことで、  
そこに非常な恩安があり、そこに力を生じ、そこに本當の悟に進むだけのものが現れて来るのである。  
功德御利益といふことも宜いけれども、たゞ一概に御利益ばかりあてにして、自分はヒヨロ〜だけ  
ども、マア引張つて呉れるだらう、助けて呉れるだらうといふので、自分で立つといふ力が少しも無く  
ヒヨロ〜して居る、それでは人間として餘りに頼りない話である。歩くことが出来なくて、自動車に  
乗るにしたところが、玄關から自動車の中に入るまでくらゐは、人の肩に促つたり戸板に載せて貰つた  
りせずして行くぐらゐの力がなくては、人間とは言へない。宗教の信解がさう純他力のやうに考へては  
本當の力が無くなつてしまふ。日蓮聖人のお言葉などを見ると、自分の信解は間違ひはない、他人が如  
何に間違つて居ると言つても、自分は確に間違ひはないと信する、それが間違ふやうな事ならば第一  
にお釋迦様を呼出して聞いて見る、斯ういふ風な勢ひを以つて、縦ひどのやうな變化が起らうともこの  
自分の法華經に對する信解に間違ひはないといふ事を確信せられて居る。縦ひ佛の相をした者が出て來



てさうでないと言はれても、それは偽者であらう。つまり法華經などの信仰に依つて悟を開くことは出来ぬなどと言ふ者は、佛と雖も許さぬ、それは法華經の御教はたゞ釋迦如來が一人勝手に仰しやつた譯ではない、莊嚴なる儀式を擧げて、斯く／＼の方法に依つて説き示されたものだ、それを兎や角言ふといふのは、佛の相は現して居るけれども惡魔であらう、正体を現せ、尻尾を見せろといふ所まで突込むといふあの自信力、あの意思力、信解の力といふものが大事なのである。それがこの人身觀上じんしんかんじやうに於いてハツキリ示されて來なければならぬ。

そこで時間上の存在と同時に、その内容の意味といふことが考へられて來るので、左様に續いて行く自己の靈魂は、形から言へば大ならず小ならず、三角でもなく四角でもない、この生命といふものは大きいものとも小さいものとも言へぬ、形を離れて存在して居るものである、どんな大きな身の中に入れても、それが爲に餘り廣過ぎるといふことはない、狭い所に入られても狭いとは言はない。心といふものは蚤のやうな小さいものの中に入つても宜し、鯨のやうな大きいものの中に入つても宜し、實に人間の靈魂といふものは大ならず小ならず、微妙なる意味合を有つたところの存在である。

であるからその靈魂の内容がどんなものかといふ時に、法華經では一切のものを具へて居ることを示された、廣く外界にあるところの天地萬物、善でも惡でも、白でも黒でも、三千の諸法あらゆる存在といふものと、自己の靈魂の内面といふものは同じものである、天地宇宙に存在するところの一切のもの

は、我が一心の内容に具備せられるものである。一心法界を包み、一念三千を具へるといふことを法華經は教へて居るのである。

併しそれを本當に了解しようとするれば大分哲學的知識を要するので、餘り事が大き過ぎるから、觀法までいかない。「ハ、ア成程」といふことがわからない。そこで已むを得ぬから、眞理はさうであるけれどもこれを少し縮めて來て、これを十界なら十界といふ靈魂あるものに戻して、人間の心には地獄の性もあり佛の性もあるといふことを考へて見ると、直ぐその意味合が心に浮ぶのである。一つの間まの心と雖も、或時は腹を立てる時がある、その瞋恚の炎の燃ゆる所は地獄の性の現れである、時には又優しい考が起つて、たゞ自分の子を可愛がるばかりではない、雪の日に炬燵にあたりながら、「あゝ自分おれは斯うして温かく炬燵にあたつて居るけれども、寒い日に雪の中を彷徨うて居る憐れな人もあらう、或は觀音様の本堂の椽の下に、仁王門の石の上に凍えて居る爺さんや婆さんもあらう、可哀さうなものだ」といふ風に、自分の見たことも聞いたこともない人間に就いても、その憐れな事を考へて慈悲の心が働く時もあるのである。さうかと思ふと一人で居ながらブン／＼怒つて見たり、いぢ／＼しいと言つて青息吐息の時もある、誰にもさういふ經驗はあるもので、その心の内容といふものは佛もあり地獄もあり、いろ／＼のものがあるといふことを認めなければならぬ。それを本當に擴げて行けば、天地の外



併しその中で恐ろしい方を言へば、地獄の性質を具へて居るといふ點である、うつかりすればそれが出て来る。併し又望みのある方から言へば佛性を具へて居る點である、吾々はどこまでも向上を辿つて善き方に行かうといふ發心があり、向上心があるのであるから、人身觀の上に一番大事なことは、吾々に佛性があつて、それを顯して行くことが出来るといふ點である。即ち佛性の開發といふことが人身觀上に於いては一番大事なことになる。

然るにそれを考へないで、たゞ現在の小さな御利益などを以つて法華經の信仰に進むといふことは非常な悪い事である。この佛性の開發といふことから考へないから、イヤ帝釋様ちや、鬼子母神様ちや、厄除日蓮ちやといふやうなことが出て来るのである。法華經はどこまでも正しき宗教であるから、自分の佛性開發といふことを人身觀の出發點に置かなければならぬ。釋迦如來が一代五十年の間様々に働いて多くの經卷を説かれたけれども、他は皆な餘計なことである。一番大事なことは衆生の佛知見を開かんが爲であつた。『諸々の所作あるは常に一事の爲なり』いろ／＼やつたやうであるけれども、結局衆生の佛性を聞いてやらうといふ一つが目的で、佛は世に出たものだ。仰せられて居る、だから法華經を正しく信解するといふならば、常に一事の爲なりと仰せられたその佛性開發といふことに本當の力を打込んで行かなければならぬ。

茲に於いて法華經を身に實行なされたといふ不輕菩薩は、人々に對して菩薩行の自覺を促されて、お前達は皆な佛性がある、菩薩行に進むことが出来るから、遂には佛様に成るのであると言つて多くの人を自覺せしめられた。それが法華經の大事な働きで、日蓮聖人の御一代の努力も、往いてはそれと同じことだと言はれて居るのである。南無妙法蓮華經と唱へるのも、人々の佛性開發の自覺を喚起するものと申して居るのである。

先づさういふ風に人身觀上に於いては生命の實在と、同時にその内容に佛性あることを確認して、その佛性の開發に向つて熱烈なる觀念の動く所が、それが法華經の本質を信解したといふことになるのである。寢ても醒めてもこの一事は忘れない、自分の身が長生をしたといふやうなことも、それは附けたり希望であつて、それよりは佛性の開發といふことが重いことである。美味い物を食うて見たいといふ慾望もあるけれども、それは幾たび御馳走を食へたところが、最後は一粒の米も咽喉に通らぬやうになるのである、滅び行く肉体のみを愛して、滅びざる靈魂、佛性の向上といふことを忘れて生涯を暮すといふのは、重いと輕いの履違ひだといふことを能く／＼分別して、無論肉体に相當な事もしてやるのは差支ないけれども、肉体の自己あるを知つて永遠の佛性の自己を忘れるが如き事の無いやうに強くその觀念を訓練してさういふ氣分に造り上げて行くことが大切である。法華經の方便品に、

諸佛世尊は唯だ一大事の因縁を以ての故に世に出現したまふ、舍利弗、云何なるをか諸佛世尊は唯だ一大事の因縁を以ての故に世に出現したまふと名くる。諸佛世尊は衆生をして佛知見を開かしめ、清



淨なるを得しめんと欲すが故に世に出現したまふ。衆生に佛知見を示さんと欲すが故に世に出現したまふ。衆生をして佛知見を悟らしめんと欲すが故に世に出現したまふ。衆生をして佛知見の道に入らしめんと欲すが故に世に出現したまふ。舍利弗、是を諸佛は唯だ一大事の因縁を以ての故に世に出現したまふと爲く。

と説かれて居る、即ちこの佛知見を開き、佛知見を示し、佛知見を悟らしめ、佛知見の道に入らしめるといふ、この開示悟入といふことを考へると、開くといふことはその人の有つて居るものを開くのである、示すといふのは佛からその事を教へられるのである、お前は斯様なものを有つて居る、それが一番大事ぢや、見本は茲にある、身はお前等と同じものだが、顯れて出ればこんなものだと云つて、佛様自ら見本になつてお示しになつて居るのである。悟らしめるといふのは、佛知見の尊さは斯ういふものであるといふこと即ち法華經を通して佛の悟はこんな有難いものだといふことを能く了解せしめる、さうして佛知見の道に入らしめるのであるから、何時もその人の信解が法華經の教に進むやうになつて行くのが、佛知見の道に入るといふことである、斯様に佛知見を開き、佛知見を示し、佛知見を悟らしめ、佛知見の道に入らしめるといふ開示悟入といふことが、人身觀上に於ける一番大事なことである。聞いて貰ふことも忘れ、示しても貰はず、示されても横を向いて居つて見ない、佛知見の道には入らないで鬼子母神の道に入つたとか、帝釋の道に入つたとかいふやうなことは、法華經に従順なる信解といふ

ことは出来ぬ。坊さんが又そんな事をこま化していつ迄もやつて居るナンといふことは、不屈至極なことである、それは人間にはいろ／＼墮落性もあるけれども、それは世間の事である、世間は世間として墮落するのはまだ／＼恕すべきであるけれども、苟も佛の教を傳ふべき者が、その教を偽つたり、教を枉げたりしてはならぬ。それは裁判官と雖も法に違つたやうな事をする場合もあらうけれども、裁判官が法を運用する上に法律を曲解したり、法律を殊更に枉げて行ふといふことは恐ろしいことである。自分一人密かに賄賂を収るといふやうな事があつて、それは法律に依つて賄賂を収つたゞけの制裁を受ければ、その人はそれで済んでしまふけれども、堂々と法廷に立つて裁判官の服を着て、「賄賂を収つても宜しい、俺の所に持つて来れば何にも差支はない」と明言するやうなことになつたならば實に恐るべきことである。佛敎に於いて坊さんがさういふ迷信を公然と許したり、自ら進んでやつたりすることは非常に恐ろしいことナンである。今後の法華行者はさういふ點を能く注意しなかつたならば、教が如何に善からうとも、その態度が悪く爲に法華經が世の中に弘まらぬのではないか。今の信仰状態を見ると多くは法華經の名に依つて、日蓮の名に依つて間違つた事を辯護して居る、これは實に法華經を奉ずるのでなくして、法華經を曲枉し、即ち法華經の袖に隠れて罪惡を犯すといふもので、實に恐るべきことであると思ふ。(次續)



# 日什正師諷誦章講話（其一）

梶木顯正述

## 緒言

吾が御開山日什上人は、御傳記にもある通り、比叡一山の能化として然かも三十有九年の間、三千の學徒を訓育された程の天台の大學者であつたが、齡ひ六十七歳遂に萬難を廢し斷乎として本化の直流を汲んで日蓮大聖人に歸伏せられた英傑僧である。

その流れに在る吾等宗門の僧俗は、一段と日什魂日蓮魂が躍動して居らねばならない筈だが、近來時代の翻りを喰つたが爲か、意氣々魄の上に幾分疎忽消沈の暗影を見うけるやうに成つて來たことは眞に残念である。嘗て御開山が起つて叫ばれた「受持分絶」は今や再び吾等の上に叫ばれなければならぬことを私達は悲ますには居られない。私は今その縁がにもと什聖御開山の唯一の御著「諷誦章」の研究を始めた。時代は益々科學的に經濟的に直進しつゝある、私の研究が果して時代の趨勢と共に歩んで行つて居るか何ふかは分らない、が然し兎も角も一生懸命に考へて居ること文は事實である。中には絶對の教主如來を、釋迦如來の理想の中に發見せんとして居る者もあるかのやうに見受けるが

私はそれには賛成したくない、議論は何處までも議論であつて宗教そのものではあり得ない。私は信仰仰そのもの宗教そのものから何處までも嚴として迷へる衆生の上に悟りの佛、救ひの佛、大慈悲の佛、三徳有縁の教主本佛釋迦如來が切れば血の出る久遠の如來相を示して「汝等！」と今正に法を示しつゝ、在支すと、信解し實感し奉る者である。恐れ多いことだが日蓮大聖人の伊豆に於ける、或は龍の口に於ける、又は佐渡に於ける信仰の御實感は正に斯うした御信仰であつたと拜察し奉るのである。故にこれから述べる諷誦章の講話は、私の信仰そのものを述べるのであるから、一個の議論として讀まれると甚だ迷惑する。

今述べやうとする諷誦章とは、諸賢も御承知の通り吾が顯本法華宗の御開山、二位の僧都日什大正師が弟子日妙上人が遷化されたについて、其の一周忌の法事を営まれる時に御佛前でお讀みになつたものである。日什聖人の御述作になつたものとして今日現存して居るものは唯だ之れ一つ有るのみである。故にこの諷誦章の原文は御開山靈滅の靈場として有名な會津若松市妙法寺に有る譯けであるが、實に宗門唯一の寶物である。委しいことは本文に付いて語るこゝしやう。



# 第一章

## 一、總標

### 敬白請諷誦事

この言葉は、御開山日什上人がこれから下にズットお述べになる文章全体の趣旨を提げて、本佛並に諸尊の御前に御教護を請ひ願ふお言葉である。で之れを總標の文と云ふ。「敬白」とは敬とは恭なりと言つてツ、シミウヤマフの意、白とは神とか佛とか或は主君とか自分よりズット上の偉いお方に對して、ものを申上げる場合に用ゆる言葉で、今御開山が身と口と意の三業の上にツ、シミウヤマフテ佛様にお願ひ申上る至禮至敬の相を言ひ現はしたのである。

「諷誦」とは世間で詩や歌を吟詠やうに節づけて朗誦ふ如きことを云ふ。古來佛教の宗教儀禮を行ふ時には必ず聲明梵唄(聲を引上げて下げる)といふのをやる事になつて居るが、それと同じ類である。この諷誦には二種あつて、一を詠讀の諷誦、二を暗誦の諷誦と云ふ、佛様に向つてお願ひするとかお誓ひするとかいふ場合に用いるのは主に詠讀の方で、自分自身が樂しむ爲とか或は大自然を讚美するとかいふ氣持から暗誦でやるのを暗誦の諷誦といふ。今御開山の場合は詠讀の方である。

## 二、序詞

### 三寶衆僧御布施在之

「三寶」とは佛教の通用語で佛寶と法寶と僧寶の三をいふ。今御開山がお佛壇の上に勸請し給ふた御加被力を垂れ給ふ佛様と、お説きになつた妙法華經といふ教法と、この佛法を護持する僧侶佛弟子達を指す「衆僧」とは日妙上人の法事をお勤めになるに當て御寶前に參列せられた僧員衆をいふ。「御布施」とは大別二種あつて一つを法施二を財施といふ、法施とは説教講演で佛法を説き聞せたりお經を讀んだり、書物を著したり其他いろ／＼五種の修行(後に出づ)を行ふて回向供養に供へるをいふ。二の方は飲食衣藥等形ある品物を供へ施して回向供養にするをいふ。今は其の兩方を兼ね備へて居る言葉である、布施とはソナヘホドコスことであるが唯だ人に物を惠んでやることを云ふのではない、御教護下さる佛様に物質的のものにして、精神的のものにしてる兎も角も一度は必ず差し上げて終ふ、それから更に其れを佛様の御惠みからお與へ下さる、之れを有難く頂く之れが眞實の布施の意味である、だから布施とはホドコスと云ふ意味よりは供ると云ふ方が重いことに成つてゐる。そこでこの心を土台として人の爲め身の爲に靈的に物的に捧げる一切の行爲を布施と思つたらよい。今は「在之」とあるから眼前に靈的財的共に供へてある供備て居るとの意味で、祭壇を中心として道場全体の實際場面を寫された文字である。



## 第二章

### 一、法ヲ歎ズ

#### 風聞一乘妙法之花者匂芬々而薰三土之舊菌

この御文は花の香りに寄せて一乘妙法華經の一代佛敎に勝れて居る所以をお説きになつた一段である。「風聞」とは謙遜のお言葉である。何しろ年代の上から云つても、釋迦如來様が佛法をお説きになつた時から比べれば御開山の時は遙かに々々末法と云ふ三千年の後代である。而も開法修學の人の上から見ても如來直聞の聖者達に比べれば、御開山日什上人は末弟も末弟もズート末の弟子の、その又弟子のその次の弟子、といふやうな譯けである。斯ういふやうな意味から御師匠様の日蓮大聖人に對し奉り御自身の身を卑下遊ばされて、お仰つたお言葉である。「一乘」とは佛法といふ敎を乗物として、釋迦如來様は衆生をこの乗物に乗せてお救ひ下さる、其の乗せる車に譬へて牛の車、羊の車、鹿の車といふやうな、車は同じ人を乗せて渡す車であつても、遠い険しい山坂を乗り越すには不完全である。丁度それは妙法華經に比ぶれば、法華以前の爾前經の如き不完全なものである、行路が遠ければ遠い程、険しければ険しい程完全な車でなくてはならない、その完全な強い丈夫な車とは即ち一乘妙法華の車である

この法華の車を大白牛車といふ。

「妙法之花者匂芬々而」これは妙法華經を譬ふるに香ひ馥郁たる花に寄せて、法の勝れて居ることを讚歎遊ばされたので、妙法華經といふお經を持つて居るその内容は佛敎全体から見、實に哲學としても、道德としても將た又宗教としても、あらゆる方面からこの宇宙の相を完全に説き顯はして居る。それは恰も春の花が咲き競ふて居る中に櫻の花が床しい香りを芬々と一段高く春風にたいよはせて居るが如く、一代佛敎の中にこの法華經は「薰三土之舊菌」この三土といふのは、古來佛敎で四つの國土（國土とは境涯）があることを明す。即ち同居、方便、實報、寂光の四土である、之れは要するに佛法修行の悟りに報ひられる境涯に四通りあるといふことである。今妙法華經の修行の結果は報ひられて必ず最高の寂光土の境涯が與へられる、けれ共、この妙法華經に來らない以前の即ち爾前經といふ四十二年間に説かれたる法に於ては、相待的に法の内容が一段二段三段と説示されたものであるから、従つてその修行の程度悟りの分に應じて與へられる果報の世界、位が違つて現はれるのである、佛敎では悟りの主體たる正報に隨つて報ひの依報（境界或）が必ず現れるものだと思はれる。（この理を業報所感又）それは學ぶ所の法が其人々々に依つて不同であるが爲である。然るに法華經は何人にも平等に絶対的の法を與へるのであるから、従つて又絶対的の境地をその報ひとして得ることになるのである。今はその絶対的の境地を與へる妙法華經が如來に因つて説き出されたのであるから舊來の相待的爾前四十餘年の法に依る果報境涯



に居つた者も、最高絶對の境地たる寂光土に咲き出でたる名花の匂ひと輝きに啓發されて、一段とその餘光に色を増し匂ひが薫じて一層見事である、といふのである、云ひ代へれば同居、方便、實報といふ三つの花崗に咲き誇つて居た花が、今寂光の崗から咲き出でた妙法一實と云ふ名花の爲に、その匂ひその輝きにスツカリ覆ひ包まれて終つて返つて三土といふ花崗は妙法華經の一乘の香りで一パイである、といふ意味である。花に對する齒を以つて對句にされた文である。

### 二、佛ヲ歎ズ

#### 本覺顯照之月者光明々々而朗寂光之青天

此處では上に法を花に擬されたのに對し、如來を天月に擬して其の御徳を稱歎遊ばされたのである。「本覺」とは文字の意味から言へば「久遠の覺り」といふ事であるが、實はその覺りを體現して生きとし生ける一切衆生の上に慈悲救護の御姿を以つて望んで居られる如來を指した言葉である。法華經の蓮門段の始成正覺の佛（始成正覺とは十九にして出家し三十にして悟）に對して、法華の本門段ではその始成有限の釋迦佛が御自ら、

我れ釋迦牟尼は、汝等はマカダ國の伽耶城の邊りに佛と成つたものである、と想つてゐるだらうが、

眞實はさうではない、已に々々久遠の大昔から佛であつたのである、救ひの如來として不滅の佛であつたのである。

と御身分をお明しになつて居る。（これを善量品の開述顯本といふ、之の開述顯本をなまつた久遠の佛釋迦如來を馬鹿な連中たやうなことを云ふ者があるが、之等は誤りも甚だ）之れを蓮門の始覺に對して本門の本覺といふ。「顯照之月」とは未だ見えなかつたものを照し顯す、即ち下界の闇黒を照して眞實の相を見せしめ給ふ月の如うに、生死長夜の暗を破し給ひ、「光明々々」如來の御慈悲御智慧御活動きは三世に亘つて輝き、利益は十方法界に窮りない御徳を指して云ふ。「朗寂光之青天」といふ寂光とは本佛釋迦如來の御境涯をいふので委しくは「常寂光土」といふ。迷の雲は晴れ渡つて澄切つた空に救ひ主の本佛如來は月の如く限りなき活動を續けてお出で遊ばすと、佛徳を歎じた文で誠に有難い一段である。

### 三、總ジテ實教ヲ歎ズ

#### 實教之沖微不可ニ測量者歟

この一文は、上に述べた法が説き明されて居る實教即ち實大乘の經「實」とは眞實といふことで一切經中の眞實を明された所謂如來の本懷を説かれて居る經をいふ。一代佛敎を小乘經、大乘經、權大乘經



實大乘經といふやうに部分けして、この部の中で一番勝れて居る實大乘經の法華經を指していふ。「沖微」とは沖とは深くして高い貌、微とは微妙不可思議の意、今此處では法華本述二門の肝要奥義を指して言はれるのである。「不可測量者歟」御開山上人が御弘通になりつゝある所の法華經の肝心、開迹顯本の經は實に高くして深いので到底凡愚の者には、測とて長サをハカリ、量とて重サをハカリ知ることとは出来るものではない、と御自身の自解佛乘の大導師であることを下し給ふて、上の「風聞」に掛けて御謙遜に成つた御言葉である。

## 第二章

### 一、本章撰述ノ趣旨ヲ明ス

伏惟 者日妙上人遷化之後秋涙未乾 一週早到聊押悲淚

修菩提之資糧

「伏惟者」とは佛天三寶の御前に慎みカシユマル姿をいふ、さうしてこの言葉で以つて前文を受け後の文を起す言とされたのである。御開山上人が此の誦誦を何ういふ譯けて御撰述になつたかと言へば

本文にもある通り、御開山日什聖人様には六人の御弟子(日義、日仁、日金、日隆、日全、日妙)があつた。この方々は、何れも皆他宗他派の人々であつたが、日什聖人様の信仰、學徳、法華經の深い經旨等に感じて改宗轉派し、お弟子になられた人達である、が中にも特にこの日妙と云はれたお弟子はお年齢は僅か十五六歳であつたが非常に利潑な方で、お師匠様の御開山は特別この方の將來に望みを掛けて、英才の器たる日妙は將來必ず妙法華經を弘める上に大功を立て呉れるに違ひないと、七十有幾歳の老ひの身の弘通の樂みに望を囑して居られた、所が十八歳にして前途有爲の青年日妙上人は病の爲に嘉慶元年八月廿七日終に遠州見付玄妙寺第一世の貫首の榮職のまゝ遷化されて終つた、實に老ひ先き短かい御開山上人には杖をモギ取られて終つたやうなものであつた、玄妙寺權信徒の愁しみもさることながら師匠御開山の御悲はお傷ましい程であつた。

この日妙上人の遷化に當つて本文にもある通り「日妙上人」とお仰やつて、御自分の弟子に對して師分の如く心から敬稱を用ひ給ひ、更に「愁涙未乾」と言はれて居られるのを見れば如何に力を落され嘆いて居られたか知れる。今この文に因つて御開山の御悲傷が知るばかりでなく、同時に又日妙と云ふ方のお年は若かつたが如何に學徳兼備の偉い人であつたかといふことが窺ひ知れる譯けである。

其處で本誦誦はこの玄妙寺第一世の貫首日妙上人の第一周忌の追善の爲に御開山が老眼を拭ふてお認めになつたもので、之れが御撰述の第一の目的であるのは勿論であるが、今一つこの誦誦章の「裏書



の置文」といふものをものされて居る點から考へて、末代我等行者の信仰受持の上に其の龜鏡として御訓誡を賜はる爲めにお殘しになつたものであることが明に感知されるのである。

「遷化」とは出家僧侶の人が「自分の受持の仕事を爲し終つたならば、その次の有縁の衆生の居る所へ濟度の爲に行く」といふ意味で僧侶の死んだ時にはこの文字を用いるのを常とする、が然し此の文字を用いて呼ばれる立派な自覺信念を持つて居る佛弟子が果たして何人有るであらうか、誠に慚愧汗顔の至りではある。普通我々愚凡の死んだのを上等に呼んで逝去したといふ、が下手にゆくと言生したと言ひ、もつと下等にゆくと言ふとクタバツタと言ひお陀佛になつた、と言はれる、が何うかお互ひはせめて死んだ後にも逝去せられた位には世間から呼ばれる様に、生きて居る間に善根功德を積んで置き度いものである。「菩提之資糧」菩提とは梵語で委しくは阿耨多羅三藐三菩提といふ、此れを漢譯すると「無上正眞道」或は「無上覺」となる。今日妙上人が御遷化になつて一周忌は早や悲んで居る間に廻つて來て了つた、何うか（故日妙上人の爲に追善供養の法事を勤めて）佛様の御救護下さる加被力に依つて、無上正眞道の御覺りと共にその位に昇らせ給ふやうに「資糧」として御本尊の前で修する法要の功德を佛様より御廻らし下さつて、覺りを開く力となさせ給はるモトデの爲にといふ意味を御開山上人はお仰やるのである。

## 二、御本尊ノ圖顯ヲ述フ

### 所謂奉圖繪寶塔大曼茶羅一幅

古來本文に「圖繪」とあるのを文字式だと見る人もある様うだが、今は素直に記されてある通り畫像と見て置く。扱て「寶塔大曼茶羅」とあるが、之れが大曼茶羅とだけあつて寶塔の二字が若し無かつたならば直ちに宗教上の御本尊として拜する事は出来ないのである。よく世間には曼茶羅と本尊の區別を知らずして終始一貫、曼茶羅と云へば直ちに御本尊のことだと想つて居る人がカナリ有る、之れは信仰上の御本尊に對する信解の上に誤りを起す根本となることであるから一言して置き度い、それはなぜかと云ふに、第一にこの二ツは語言の上に意味が全く別であることである。（其のことは後に）其處で日蓮聖人が佐渡に於て初めて御圖繪に成つた曼茶羅式といふものは、一面に於ては佛敎即ち法華經の宇宙觀を見寶塔品第十一の構圖から復寫されたものであるが、同時に亦この佛敎の宇宙觀がそのまゝ佛法を第一義として起された、佛弟子日蓮聖人の宇宙觀でもあるのである。それを其儘受入れたものであつて、何等日蓮が細工を加へたものでは無い、といふ事は大聖人自ら御遺文の上にハッキリ「日蓮が自作に非らず」と斷り書きがしてある事から見て明かなことである。であるから言葉を代へて言へば、日蓮聖人



の御心に映つた宗教的の宇宙觀を表現されたものがこの曼荼羅の圖であると云つて差支はないのである。故に曼荼羅式とは、宇宙のスペアの物は實際は相互の因果關係に因つて（相互の因果關係とは所謂法華經の「後」に於て、悟れる佛も迷へる汝等も同一水準にあつて平等の價値を持つて居るもので）この曼荼羅の理の如くに存在して居る、との理を平等論の立場から曼荼羅に依つて顯はされたものであるが、故にいふ。この曼荼羅の理の如くに存在して居るので、それを佛敎哲學の側から寫し現はしたものであつて、其の哲理を組織的に圖繪の上に体系づけ、て顯したのがこの大曼荼羅である。されば古來此の曼荼羅を「十界互具の相を現す」と言ひ、或は「輪圓具足、圓滿具足の相」と云ふのである。そこで、曼荼羅とは斯うした意味のものであるが故に、理論的に哲學としての價値は持つて居るけれど、宗教としての絕對的救護の權威といふものは無いのである。故に従つて信仰的御本尊とする譯けにはゆかぬ、が然し斯く言つたからとて、それでは曼荼羅は絕對に信仰上の本尊とはならないか、といふと必ずしもさうではない、此所が大事な所である。それはこの理論的曼荼羅の平等論の上に救ひの權威を持ち給ふ如來の在ります寶塔が現はれ、奉安される事になるといふと、立派に宗教信仰の御本尊として其の價値權威を完備し發揮して來るのである。（その事は）何故かといふと、寶塔とは絕對的宗教の救ひを持つて御座る佛様が在ります御寶殿であるからである。されば、宗教の本尊として圖繪する場合は本尊の哲學的根據と成つて居る曼荼羅を背景として或は足場として、其處に宗教的救護の絕對的權威を持ち給ふ寶塔を圖繪し奉安するのでなくてはならない。今本文で「奉圖繪寶塔大曼荼羅一幅」とあるのは、理論的に十界互具の平等論を体系づけた曼荼羅の圖を現はしたと云

ふのではなくして完全なる宗教信仰の救護者たる御本尊を寫圖し奉つた、とので意ある。故に俗な言葉で云へば曼荼羅とは佛様のお現はれになる場所或はお乗りになる臺座だと思へばよい。

### 三、修行ノ次第ハ從淺至深ナルノ旨ヲ明ニス

奉讀誦妙法蓮華經一部方便品一十二卷壽量品一百二十卷十如是一千二百卷自我偈一萬二千卷題目一億二萬遍

この一段は佛敎の修行には總別あり、廣、畧、要あり、又從淺至深として淺きより深きにと修するものであることを明された所であるが、今「奉讀誦妙法蓮華經一部」とはその修行の中の總の行を擧げられた段で、妙法蓮華經一部八卷を御修行になつたので之れは廣、畧、要の修行の中には廣の修行に當る。次の方便品一十二卷より題目一億二萬遍までは別の行をお出しになつたのである、この方は廣畧要の中では畧の修行に當る、本文の十如は自我偈を修する方を畧の行とすれば前の方便品、壽量品の行は廣の行に當り、中の畧の行に對すれば後の題目行は要の行となるのである。この内の「十如是一千二百卷」とあるを方便品の前半だと見る人があるけれども其はやはり文字の通り同品中の諸法實相を説く十如是の文と見るのが妥當である。そこで此の「經を讀む」といふに二た通りあつて、一つは文字を見て



讀む方を言ひ、二つは誦として全然文字を見ずにソランジテ讀むことをいふ、が然し何れにしてもお經を讀むといふことは正助二行の中では助行となつて居るのである。助行とは自分の爲の修行の場合には、自己の信仰の増進を助けることとなり、之れが他の人の爲の場合には回向増益を助けることとなるのである。(お經を讀む心持ちから云ふと、如來に感) 故に之を助の行と云ふ、之れに對してお題目を修行する時は、正しく中心の目的たる成佛得脱そのものを直接に開き進める、力であり功德であると共に、之が他の爲の場合には他の成佛を得せしめる主動力となる、之を前の助行に對して正行といふ。古來我が宗門ではこの二行を從淺至深の修行の格に従つて、助行を前にし正行を後にするのである。よく正行助行と云ふと、正行と云ふ題目の功德を助行といふお經の功德で助け補ふことだと感違ひをする者があるのだが、それは甚だしい誤りで、正行のお題目は一切經に明されたが如く如來の積み給ふた功德を結昌したる功德珠であり、助行のお經文は其の功德を説明したものである。されば經文とはその持つ處を示したものであつて我等行者の信解を深め高めて主願を達せしむるやう、道念の増進を勵ます働きを爲すものである。それを題目だけでは力が足りないから杖となり力となつてやるのである、なぞと考へたら大變な間違である。各々互ひに正しく信解し奉るやう心をいたさねばならぬ。

#### 四、別シテ要行ノ書寫ヲ述ブ

##### 奉書寫一南無妙法蓮華經一萬二千遍

これはお題目は正行であるから、故精靈の追善の爲に重ねて五種の修行の中の讀誦の二行を経て、更に書寫の行を修されたるを擧げられたので、この讀誦行、書寫行等は古來から盛んに行はれて居る佛法修行の型である。五種の修行とは受持行、讀行、誦行、解說行、書寫行の五ツを云ふ。そこで南無とは歸命と言つて「如來に命を捧げて歸依し奉る」と云ふことで、本宗で「今身より佛身に至るまで能く持ち奉る」といふことを唱へるのは其心を明せば、今のこの「歸命し奉る」といふ心と全く同じである。されば之れを昔から受持文といふのはそれが爲である。次に「南無妙法蓮華經」であるが、同じ日蓮門下の中でも之れを一切衆生を救護し給ふ佛様の尊號である、と云ふ者がある。かと思ふと宇宙法界の諸法即ち猫もシヤクシも凡夫も佛も一切合切皆這入つて居る合切袋のやうなもので、之れが佛様でこの他には別に救ふ佛、救はれる凡夫といふやうなものはないのだと考へて居る者もある。然かもそれを此方の本には斯うある。彼方の本には彼あるといふやうに、さうした文句を引出して來て理窟でそれをコネ上げんとして居る、これでは信仰を語るのではなくしてハサミとノリで作出した理窟法門である。少



なくとも宗教である以上は理窟の切りバリ法門でなく、暖い救ひの来る直信を説くのでなくてはならぬ。昔し實相同といふ立場から本述二門は一つである、といふ考へから法華經には勝劣淺深は無い、といふ議論を立てた者があつたと聞くが、今の二種の妙法觀は即ちこの實相同から這入つて本述は一なり、といふ考へが方の自然に落ちかねばならぬ所へ落ち着いた當然の歸結であり、運命であり、途行きであつたと言つてよからうと思ふ。

で之れでは説明だけは宗教の形をして居るやうではあるが未だ非人格的であつて宗教そのものとはなり切らない、やはり宗教の衣を着た哲學である、少なくとも宗教ならば救ふて下さる佛様、護り導いて下さる如來が法と共に別な相で嚴然と迷ひの世界の上に在まさればならぬのである。之れは宗教としての最重要點であつて、若し之れなしといふならば斷じて宗教では無い救ひではないと斷じなければならぬ。

それは何故かと云ふに手を合せ頭を下げて禮拜する所が無くなるからである。宗教としては無いものがあるが如く、又有るつもりで祭壇を置いた方が便宜だ、といふが如きことは絶対に許されないことである。そこで法華經には如來の上に十號(十號とは十通り)といふのを説いてゐる。即ち如來、應供、正徧知、明行足、善逝、世間解、調御丈夫、天人師、佛、世尊の十であるが、何れも皆人格的存在者である事を顯はして居る御名であつて、妙法蓮華經佛といふが如き非人格的なるものを、特にいかにも人格的

のものかの如くに裝はしめたものは違ふのである。で問題は妙法蓮華經(之れは原則としては非人格的な法と見るか、人格的な法と見るか、人格的な佛と見るか、と云ふ所から起つて來るのであるが、之れを人格的佛だ、と見る人は壽量品の「我レ佛ヲ得テヨリ」と言はれる「我レ」とは妙法蓮華經其のものを云ふと考へて居るのである。が然しこの考へ方を容すことゝなれば本來人格的な「我レ」と言はれる佛様が、彼等に依つて非人格的存在の佛となつて終つた譯けであるから、慈悲が出て來たり、壽命があつたり、住み給ふ國土があつたり、説法をされたりなさる事は考へられなくなつて來る譯けである。然るに法華經の第十五涌出品、第十六の壽量品には歴然と生ける佛様が御自ら「汝等ハ今ノ我レ釋迦牟尼佛ヲ見テ摩訶陀ノ王淨飯王ノ子デアツテ僅カ數年前ニ覺リテ佛ト成ツタ者ダト思ツテ居ツタデアロウガ、我レ釋迦牟尼佛ハ實ハ古イノ大昔カラ已ニ佛デ有ツタノデアル」と、御自身で久遠の古佛なることをお明しになつて居られ、亦同時にその壽命その國土(即ち教化地)その説法等を示され、絕對慈悲の大本願を説かれるのみならず、「我レハ世ノ父ナリ」と言はれ「我レハ能ク一人ニシテ衆多ヲ救ヒ護ル」と仰せられる。之れは即ち根本から人格的存在者であり實在者である、と、云ふことを何等のアーヤもなく如實に赤裸々に指示し給ふた所である。法華經の文字をウガタズ曲げず素直に有りのまゝに見るならば斯うなつて居るのである。何を苦るしんで斯くも明瞭に「我レ」とお仰やる人格的如來を非人格的な妙法蓮華經と見たいのであらうか？ 要するに如是誤りを生ずるに至つた原因は「眞實の依文判



義は本門に限る」とこの教判を知らざるの罪か、さもなければ「自己の主張は捨たたくない」といふ我執の結  
果か然らずんば認識不足の致す處か或は餘りにも詮鑿し過ぎた弊か、又は他に考ふる所があつてか、何  
れかに有るのではあるまいか。

日蓮聖人の御明しに因れば、之の妙法蓮華經は「文ニ非ズ義ニ非ズ一部ノ意ナラクノミ」とある、こ  
の「意ナラクノミ」とは、如來が御自身の持つて御座る「大慈大悲の心を込めたもの」の謂で、即ち功  
徳珠のことである。が然し妙法蓮華經には元來今いふやうな宗教的方面と共に又哲學的方面をも持つて  
居るので、それは曼荼羅と云ふ十界互具輪圓具足といふ平等論的側である。其所でこの宇宙の全的互具  
の平等觀を、曼荼羅といふ形式に依つて体系づけた其の体系形態に被むらせた一音の法的名が妙法蓮  
華經である、となる譯けであるが、如何に宇宙の全体(曼荼羅)を包んで居るが故に、それに被むらせて  
妙法蓮華經といふのだ、と言つたからとて、それを以つて直ちに「妙法蓮華經佛」だと考へることは誤  
りである。一体斯ういふ考へ方は、法から佛と言ふものは出て來たものである、と考へて居るからであ  
る。法華經では昔から、佛とは法を悟られ其の法を功德化された方で、法界三千の諸法を大慈悲の中に  
包んで然も又その包んだる諸法の上に再び働きかけて居られるのだ、と説かれるのである。其處で佛様  
は法を悟られた方であるが、その法は佛の悟りに因つて教へとなり功德と化すので、悟られざる以前の  
天然の法自然の法は「花は紅なり柳は綠なり」と云ふ理法として存在するのみであつて、何等積極的に

我等の上に教済力といふが如きものを以つて働きかけるものではなかつた、言ひ代へるならば、之の自  
然法は間接には我等に關係があつたかも知らぬが、少なくとも直接には個々の間には關係はなかつたの  
である、即ち宇宙萬法の各々が機械論的な無目的の因果の法則の中に動くか、動かされるかして居たに  
過ぎなかつたものが、如來の出現に因つて宇宙萬法が慈悲化された爲に有目的論的因果の世界と轉化さ  
れて來たのである。之れは人格的なる救護救済の如來の出現に依つて新しく轉化して來たのである。

然るにそれを如來が出現したのも無目的の因果律が有目的に轉化したのも、衆生救済に如來が働き給  
ふのも悉く妙法蓮華經の力であり又は妙法蓮華經佛の働きである、と考へるのが尊號佛論者、合財袋佛  
論者の見方である。前にも云ふ通り之れでは宗教の如くにして宗教に非ざる似て非なるものである。そ  
こで以上の信解に基いて妙法蓮華經とは嚴として實在し給ふ教主佛陀大慈悲の救ひの手であり、教へ導  
く繪であり、慈悲功德の珠であると信するのが尤も正しい信解である。故に妙法を良薬と言ひ慈悲の結  
晶であると云ふのである。文字の説明をすれば妙法とは如來の救済し給ふ力用より下されて居る所の慈  
悲々願の結晶、蓮華とは其の結晶の内容を譬へたもの、經とは功德の法と譬とを合せ終へ備へて居る所  
を云ふ。お互ひに理解では如何様にも考へ得るが、教はれることを第一として信解し奉るやう注意せね  
ばならぬ。



## 五、率都婆ノ造立ヲ述ブ

## 奉ニ造立ニ率都婆一本

「率都婆」とは寶塔のことで、神力品に「塔ヲ建テ、供養スベシ」とあるをいふ、率都婆を造立するのは佛法供養の式の中では尤も重要な事の一つである、之の塔婆は如來の在す寶塔の形を寫したもので之れを造り奉ることは功德甚重の事と明されて居る、故にその尤も功德の甚大なる佛事を教主世尊に捧げ奉つて、さうしてその功德を志す精靈の方へ手向けんとするのである、されば一本と云はずに一基といふのが本當であるが、後來その型だけを一本の木で寫すものだから、御開山も暫らく世間の例にならばれて一本と仰せられたまでである。

この塔婆の形は地、水、火、風、空の五臺に型とつたものだともいふ。

## 六、曼茶羅圖繪ノ時ヲ明ス

## 然、大曼茶羅者幽儀存生時奉書寫之ニ處

今は先に安置する處の大曼茶羅を圖顯された時期を明されるので「幽儀存生時」とて幽儀とは幽冥界

を異にした人との意味で、逝かれた故日妙上人の精靈を指す、其のなくなった人が未だ存生として生きて居られた時に拜寫したものであつた、との意である。勿論前の寶塔大曼茶羅とあるを指して居られるのであるから宗教の御本尊であることはいふまでもない。

## 七、本尊奉安ノ目的ヲ明ス

## 聊、欲展ニ供養ノ儀式ニ捧ニ追善

「聊」とは物の十分に調はない容をいふ、今故精靈の追善の爲に一周忌の法事を営むのであるが、思ふ通りにはゆき届きませぬとの謙遜なさるお言葉である。「展」とは敷き延べる又は開き整へる、の意味で故精靈の追善供養の爲に法事の儀式を延べ敷き整へる爲、捧げ奉つたのであるとお仰やる。(次續)



(各地教報は紙面の都合に依り次號へ)





皇紀二千五百九十三年、昭和八年癸酉の元旦は日本晴で何となく本年は朗かな前途のやうに私共は直感せしめられた。

本會館初詣の第一着は七時笠間信語氏、それから上田理事長、和賀氏等々の順序であつた。何しろ未だ開館式前で全部完成といふ境に到らず、従つて公開する譯にも行かず團員諸氏は一般には來たくもどうか躊躇された方々もあつたやうで、洵に恐縮であつた。

慮に私共はこの會館が、或る程度使用するに少しも差支ない事を眼前にして、どうしてこの歡びを其のまゝ打過ぎることが出來やう、取敢へず新年會を開館式に先ちて内々開催しては？との案が幹部會に提議され一同賛成で、七日午後四時修法、五時開禮、座談、七時教會の順序として京濱の團員諸氏に

御案内を申し上げた。

何しろ新年の事とて御通知が年賀状と混乱して延着や不着せる向もあつたことを承つて、案内係は大恐縮の態でした。

當日は幸にも前日來の寒雨が全く晴れて、一天拭ふたやうに陽春の麗かさ！寔に温和な恵まれた日であつた。熱誠な諸氏は早くから來館御盡力下さつたことは實に有難い極である。

本團は時間勵行を嚴守しやうといふので、正四時梶木、和賀兩師唱導、新春の修法が木の香も高い、神々しい御寶前に、馥郁たる芳香の紫檀に包まれて落ち付いた燈光と相和し、日生上人御肉筆の大曼荼羅御本尊の猊下署名點に、恩師の御遺骨を安置、莊嚴された御寶前に七十の來賓は異口同音に和唱した。五時から階下の講堂に着席、開禮に對答の運びも忙しかつた。やがて梶木師を司會者に推し、先づ岩野直英閣下の御感想を拜聴することにした。閣下のお述べになつた要旨は左の通りである。

今日は新年に方つて皆さんにお目に懸ることが出來て、何よりも嬉しい事は、皆さんのお骨折

に依つて斯ういふ立派な會館が出來たことであつた。これ程の建築を完成する迄には、如何にお骨が折れたらうといふことを推察して、深く敬意を表する次第であります。私は斯ういふ法の空氣の充滿する處、或はお題目の聲のある處ならば、

何處でも良い心持で參るつもりでありまして、其處に於けるお講義の良否は構はない、法の住する處には私は何時でも悦んで行つて、その法の中に沐浴するといふやうな氣分で參るのであります。

その意味に於て、悦びに浴る場所が一つ殖えたいふ事は非常に嬉しく思ふのであります。丁度お經の中で言へば多寶如來みたいなもので、何處でも法の住する處ならば參るのであります。さうして、是は自分ばかりではありませぬけれども、自分もやはり本多日生上人の使として參列するのであると考へて居ります。皆さんもやはりその位の考を有つて居らなければいけないと思ふ。

新年の所感としては、今年は今言つた法といふことに就て、諸君の信仰には及ばないことでありませぬけれども、自分はよほど感激の念が増して參り

ました。昭和七年中は、方々講演に参りましても國體の事、天皇陛下の事、軍人勸諭といふやうな事を主として、それを表面に出さない場合でも、さういふ意味合の講演をしたり、又座談をして居つたのであります。どうしてもその話は

天皇の稜威といふものになつて参ります。それをだん／＼考へて参りますと、その有難い事を一番ハッキリ教へて下さるのは法華經であつて、佛の稜威といふものが吾々信者の周圍に充滿して來る、それを味ふことが非常に有難いといふことが判りまして、如何にも法華經は日本の國を護るのに第一の教であるといふことを考へまして、所謂正法、佛の法が有難い、それに加ふるにこれを世間に充滿して、正法興隆するやうに、所謂立正するやうにと日蓮聖人が努力せられた、これはモウ第一義であるといふことが、私は今頃になつて漸く解つたのであります。そこで今年、天皇の稜威よりも、モウ一つ範圍の廣い本佛釋尊の稜威を天地に充滿すべく努力する、これが吾々の立正の道であらうと思ふのであります。この佛の法の



存在、法の影響を受けることなくしては自力更生もなにも出来ない、自力更生を間違へてむやみに自力々々と言つたら、それは外道の骨頂でありま、本當の自力更生は、自分の力の限り盡すといふことに、必ず法の有難い力が及んで、その中に住して而して自力更生が出来るのである。何事も法の力に浴せざるものは悪なり、佛の教に住せざるものは悪なりといふことになる。『如來の現在猶は怨嫉多し』といつて、善い事を教へて何故怨嫉があるかといへば、人の知らない事、佛を信ぜざれば悪なりといふやうな猛烈な事を、吾々の教の先祖であるお祖師様から始られた、吾々の直接の師匠の本多日生上人もやはりその意味に於て折伏をやつて來られたのでありまして、吾々はその志を繼いでいよ／＼此の法を護り、法にあらざれば人は生きて行かれぬものだといふことを、第一義にして行きたいと思ふのであります。

財團法人統一團は今後いろ／＼な意味に於て活動する方面はありませうけれども、それだけは忘れないやうに高調して行かなければならぬ。これに就いて非常に心配して居られました。どうしても法華經を以て文化を啓いて行かなければならぬといふ意味合の事をお話になつたのでありましてをいろ／＼私も感激した譯でありませうが、今日思想を論ずるのに、これを右と左に分けて居る事が非常に大きな間違であります。官憲までも左右を成敗するといふやうな事で血眼になつて居る、甚だ不可解な現象と申さなければなりません。西洋には國家はあるけれども國體といふものはない、所謂明教といふものが無いから、思想を眞に區分することが出来ないものであります、片面的の社會でありますから、どうしても左右に區別する以外には方法が無いので、己むを得ず左右に分けて居る即ち社會主義の傾向を帯びたものを左といふならば、國家主義の傾向を帯びたものを右と認めて居るやうであります。吾々大和民族は、さういふ平面的な思想に依つて集團して居るのではない、更に縦に遠く繋がつて居る高度の文化の民族である歐洲人よりも更に高度の文化民であります。それ故に吾々は現在の横の社會の事も考へなければな

捉へることに依つて、いろ／＼な國體、いろ／＼な宗旨宗派も皆そこに歸一し得ると思ふのであります。暫くの間いろ／＼に分れたやうな形になつて居りましたが、その個々別々のものが、皆この法を護る、即ち本氣に南無妙法蓮華經を唱へるといふ事に力が注がれたならば、所謂統一團といふ名前に恥ぢざる所の思想團體の先輩として、或は指導者となつて行くことが出来ると思ひます。

新年に方つて統一團の將來を祝福する意味に於て私は法の尊嚴なる事を感じて、而して諸君にも此の大旗を押立て、進まれるやうに、自分も前からさういふ事は知つては居つたけれども、今年は前よりもそれが一層ハッキリ解つたやうな氣持がしまして、痛切に護法といふ事は本當に必要なことだと感しましたから、之を所感として申上げた次第であります。(拍手)

續いて井上男爵は起られた。

私は昨日の朝關西の方から歸京したのであります。が、降雨の中を大迫大將閣下がお見えになりました、今岩野閣下が言はれたやうに、護法といふ事

らぬけれども、更に強く祖先の遺風を顯彰することも考へなければならぬ、又子孫の事も考へなければならぬのであつて、どうしても思想は正見、邪見と分たなければならぬ。正見とは公正圓滿なる思想であつて、邪見といふのは偏傾した三角になつて居る思想をいふのであります。或は國家主義と社會主義——社會主義を約めて行けば共產主義になるのであつて、國家主義對共產主義、或は宗教思想對反宗教思想、斯う分たなければならぬ。或は日本の國家から言へば忠義の思想、叛逆の思想と分たなければならぬ。然るにこれを右と左に分つて、兩方とも之を成敗しようとするに於て、非常に思想が亂れてしまふのであります。此事は日蓮聖人あたりはよほど強く唱へられたことであつて、思想を分つのに曖昧模糊たる標準を以てしたならば、どちらが善いか判らぬことになつてしまふのであります。

私は昭和八年といふ歳は、よほど大切な年になりはせぬかと思ひます。如何なる事變が此の年に起つて來るか、想像がつかない、恐らくは此の年に



於て日本は大いに興るか、大いに敗れるか、非常な岐路に立つのではないかと思ひます。今や共產主義は裁判官の中にまでも進んで居る。宮内省の中にも發見されて居る、學習院の方面にも現はれて居る、或は三越の店員の中などにも澤山現はれて居る、今や共產主義は大衆化して各社會層に植付けられて居る。獨り無産階級ばかりでなく、有産階級に對し、農村に對し、實業界に對し、軍隊内に對し、あらゆる方面に及んで居ります。恐るべき悪思想が日本の社會の各層に蔓りつゝあるのを見て、何と考へられるか。如何にも護法といふ事の必要を私も痛感するのであります。

そも、明治の維新は未だ完成して居らない、大正、昭和となつて最後の磨きをかけなければならぬ時が來たのである。今日の非常時といふのはその意味であつて、これを大化の改新並に幕末維新の際に比べたならば、より深刻に、より複雑なるものがあるのであります。我國の歴史を見ると、第一回の改革は神武天皇の東幸でありました、第二回の改革が大化改新であり、第三回が明治維新

遣つて居るすべてが物語つて居ります。併しながら中道にして王政振はず、遂に鎌倉に頼府が開かれて、日蓮聖人が出られた時分には恰も復古運動の最中でありました、建武中興は終りを全うしませんでした、その御精神はやがて明治維新を産んだのであります。仁孝、孝明天皇に端を發した明治維新は、大正昭和と實施の經過に鑑みて、更に改むべきものは大いに改めなければならぬ時代に際會しつゝあるのであります。

然るに惜むべし、幕末の際に排佛毀釋の思想が盛んであつて、日本の文化の中から大事な佛教文化といふものを取去らうとした運動が起つて居つたのであつて、それに代るところの神ながらの教もその信仰は稀薄になつて居つた、又支那の儒教の學問も形式的になつて、遺憾ながら日本の文化の正統が非常に混亂を極めて居つた爲に、折角の明治維新も幾多の禍源を遺して、今やその終末を告げなければならぬ時が來たのであります。

私は徒に先輩の努力の跡を彼れ此れ論議するのではない、先人の偉大なる功績は感謝するのである

でありました。此の三大改革は殆ど人類社會に於て他に類例を見ることの出来ない大改革でありましたが、その大化改新は端を聖德太子に發して居ります、聖德太子の御理想を以て、太子薨去の後二十四年にして中大兄王子がお立ちになつて大化改新を遊ばしたのであります、此の複雑なる日本文化を一朝にして改革することが困難であつた爲に、文武天皇の大寶律令を發布されるまで前後百二十年間かゝつて居ります。これに依つても我國の文化は、非常に深く植付けられたもので、謂はゞ非常な重錘が下について居る國家であることが判るのであつて、並大抵の事では日本の社會は改革することが出来ません。露西亞のやうな國、獨逸のやうな國であつたならば直ちに顛覆することが出来るけれども、日本のやうな國は到底顛覆することが出来ないといふことは、此の大化の改新を見てもわかるのであります。その考を以て奈良朝の文化、平安朝の文化といふものは現はれて來たのであつて、其の文明は今日の世界の文明に比して更に遜色のないものであつた事は、今

けれども、この佛教を蔑ろにされた事柄は、吾々が先人に代つて補はなければならぬと考へるのであります。今や我國のいろ／＼な思想の混亂は、此の大事な佛教を無視した事から起つて居る。今日の知識階級の人は殆ど佛教といふものを知りません、吾々の小學校、吾々の中學校、何等佛教の事に就て教へられた経験を過去に有ちません。而も此の偉大なる佛教を忘れたならば、到底日本文化を完成することは出来ないものでありますから、茲に吾々は大いに悔ひ改めて、佛に對して無禮な事をしたことを懺悔しなければならぬ時が來たと思ひます。

此の意味に於て私は昭和の維新といひますか、明治維新に最後の磨きをかけるべき時機と申しませうか、實に大切な時が今日に來て居ると思ひますこれが總て明治大帝の皇謨を翼賛し奉る所以でありまして、一たび日本民族が偉大なる佛教に目覺め、自分の固有なる文化に目覺めて來た時には非常な大きな躍進をすることを疑はないのであります。恐らくは今年に於て其の事が始まると思ひま



す、國民の覺悟次第でありますけれども、その契機は今年に來て居ると思ひます。外は國際聯盟、或は亞米利加、露西亞が盛んに日本に對していろ／＼の活動をして居る、内にはあらゆる思想が混亂を極めて居る。今の政治家、今の學者では到底これを治めることが不可能であります、誰か起つて此の困難なる國難を打開する者が出なかつたならば、此の國危しと思ふのであります。

此の秋に於て統一會館が出來まして、此處に於て正法を講ぜられるといふことは、洵に慶賀に堪へません、又深き因縁があるやうな氣もするのであります。どうか日本人がすべて法華經の文化に歸るやうな運動を起したのであります、どうしたら起すことが出來ませうか。昔は平安朝の文化奈良朝の文化、みな法華經の文化でありました。さうして國力も隆んであつたのであります、今や大陸に日本民族は發展せんとして居ります、世界に對して戦ひをせんとして居ります、それは文化の戦ひであります、東洋文化、日本の文化が勝つか、歐洲の文化が勝つか、非常な大きな文化戦が

に申すと第一に我國の世界に於ける位置であります。此事に就ては曾てお話しした事が『統一』誌に出て居りますから、それを御覽を願ひたいと思ひますが、日本と英國とは地形に於て、また國情に於てよく似た點があります。然るに英國はたび々々他の國から侵略せられ、奴隸の生活を營んで居りますけれども、日本は未だ曾てさういふ經驗がない。斯様に誠に目出度い國であります、これは何の爲であるかといふと、一には此國の位置が大陸から離れて居るといふ點もありませう、又英國とは違つて日本は穩かな弱い民族に依つて圍まれて居つたといふ點も、決して看過することは出來ないと思ひます。併ながら今日は非常に情勢が違つて來ました、即ち今日の文明の進歩といふものは、距離を短縮せしめた、昔は支那あたりから攻めて來るのは容易でなかつたが、今日は浦潮方面から遠い船ならば一晝夜でやつて來る、飛行機もドン／＼飛んで來ることが出來る、米國からでも數日間によつて來られる、又飛行機を積んだ艦が日本へドン／＼やつて來ることが出來るといふ風で

現出されようとする時であります。此の時こそ法華經文化といふものが日本の力とならなければならぬ大事な時であらうと思ひます。今までのやうな唯宗派の佛教といふやうなことを考へず、全佛教を打つて一丸とし、さうして東洋に於ける精神文化を高調すべき時が來たのであります。

どうか皆さんもさういふ潤大な考を以て、昭和八年に對して覺悟を定めて戴きたいと思ふのであります、聊か祝辭を兼ねて所感を述べた次第であります。(拍手)

井上男爵のお話し中に御多用の上田理事長は馳せ付けられ、閣下のお感話終るや謙讓な理事長はやがて御懇篤な至誠の籠つた護法愛國の淨念を披瀝された續いて佐藤中將は左の如き一場の御感想を語られた。

私は豫ね／＼考へて居る事に就て少しお話しして見たいと思ひますが、日本といふ國は全く神佛から惠まれたまことに目出度い國であると思ひます。これを色々證據立てる事は澤山ありますが、簡單

今日は距離の遠いとか近いといふ事は問題でなくなつて來て居ります。斯ういふ風でありますから今日は一孤島に隔絶して居るといふ事は保護にも何にもならない。併し昔はそれで保護せられて居つたのであります。

斯様に日本が保護せられて居つたといふ事は、これ亦私は偶然でないと思ひます。佛神は日本を大事に保護して呉れて、恰も苗床に置いて呉れたものと私は見て居るのであります。斯様にして日本の民族は非常に包容力が強い、日本の國體は包容力の大きいこと實に大海の如きものでありますから、大陸の文化がドン／＼取容れられたのであります、それが、それも無茶苦茶に取容れたのではない、無茶苦茶に取容れさうになると、聖徳太子のやうな偉い方が出て來られてこれを日本化されたのであります。聖徳太子は佛教の最も恩人でありましたけれども、聖徳太子の教は決して佛教には限らない、日本の神道も取容れ、また支那の儒教も取容れてこれを日本化せられて居るのであります。斯様に夙く聖徳太子のやうな方が出られて、日本の



文化の基礎を築いて下さつたことは、日本が非常に恵まれた國であると考へます。

また佛教に就て考へますと、日蓮聖人の出られた時代は、大陸方面に於ては、宋の文化が爛熟して、野蠻人であるところの蒙古人から征服せられた時代であります。其の間に宋の立派の學識を備へた坊さんが日本にやつて来て、佛教を日本に傳へた、併ながらその教といふものは、如何にも亡國の教ではなかつたかと思ひます。個人としては立派な坊さんであらうけれども、日本の國體に即したやうなではない、やはり宋の國に相當したやうな佛教であつたと私は考へて居ります。その際に敢然として立つて日本流儀の佛教にしようとなつたのが日蓮聖人であると思ひます。これも天が日本のために日蓮聖人を下し賜つたものだと私は信じて居るのであります。

また明治の前の時代に於てどうでありましたかあの當時歐米諸國が侵略主義を採りまして東洋に臨んだのであります。たゞ幕府だけであつたならば日本はどんな目に遭つたか知れない時に於てま

して、孝明天皇、明治天皇といふやうな偉いお方が出られて、日本を立て直されたといふことも、日本としては決して偶然ではない、神明の加護に依るものであると私は信じて疑はないのであります。

斯様に考へて見ると今後の事變に於てもその通りであります、吾々は從來の日本の外交の軟弱なることに對して非常な憤慨をしたのであります、併ながらこの軟弱なる外交があつたからこそ、今度のやうな日支の紛争事件が起つたのであつて、これがあんな軟弱な外交でなしにいゝ加減な外交であつたならば、斯ういふ大事變は起らなかつたと思ひます。此事變は解決がどれほど拙く行きましたところで、日本の爲には非常な好い結果を齎すに違ないのでありますから、此の事變を起したことは軟弱外交の賜ものであると言つても宜からう思ひます。また今度の事變に對して國民が一致團結して、吾々は國際聯盟に對し、又米國に對して非常に憤慨するのでありますけれども、若しも國際聯盟や米國があゝいふ態度を執らなかつたな

らば、我國の民心はこれほど迄に一致團結しなかつたらうと考へるのであります、私は斯ういふ點に於て寧ろ國際聯盟や米國に對して感謝の念を有つて居るのであります。即ちすべて日本の爲に悪かつたと思ふ事が好く轉じて來るといふのは、日本が神佛から非常に恵まれた國であるといふ證據だと私は信じて疑はないのであります。

斯様に何もかも結構づくしでありますけれども、斯うなつたのはやはり日本の國民が其の處に於て善處して來たからであると思ひます、唯だ何もしないで居つて斯ういふ良い結果を齎した譯ではないのであります。日本は斯の如く初めから他の國から侵略を受けないやうに恵まれて來て居る、さうしてだん／＼大きくなるに隨つてそれ／＼の事件が起つて、日本の國體を安定せしめて、これを以て世界に光被するやうになつて來ることは、非常に有難い事でありまして、此點に向つて吾々國民は大いに奮發しなければならぬと思ふのであります。

之に反して歐米諸國は今日どうでありますか。

十數年前の世界大戰に依つて、千五百萬人の人を殺し、三千萬からの負傷者を出して居ります、金に於ても直接間接の損失を計算すると四五千億といふ金を費して居ります、その爲に彼等の得たるものは、今日のやうな不景氣と、また人心が險惡になつたといふことで、その以外に何等の得たる所はない。そこで彼等は、自分等の今までの考は間違つて居つた、自分等の精神文化は洵に低級なものであつた、どうしても吾々の考を變へなければならぬ、どう變へたら宜いかといふと、東洋には佛教といふ高尚な精神文化があるといふことに目覺めて、或は印度に、或は支那に、或は日本に、いろ／＼研究する機運が起つて居るのであります。

然るに東洋の精神文化が何處に遺つて居るかといふと、其の本源であつた印度にもありはしない、又支那にも殆どありはしない、纔に日本に存在して居るのであつて、日本は日本的にこれをチャレンジ造り上げて立派な東洋文化を形成して居るのであります。併ながら今日の程度では未だ本當のも



のではないでありませう。此點に於て私はこの統一團の創立者であらせられる本多日生上人を憶ふのであります、本多上人も聖徳太子や日蓮聖人と同じやうに、固より法華經の精神であられたのでありませうけれども、日生上人の言はれる法華經の精神は、神儒佛三教を圓顯統一せられた思想であつたのでありまして、決して偏狹なる排他的の思想ではなかつたのであります。即ち統一團といふ名前から考へましても、必ずしも顯本法華宗ばかりではない、必ずしも日蓮宗の人ばかりではない吾々のやうな日蓮主義もナニも知らない者をも包容されて、立派な東洋文化を完成しようといふ御精神を以て造られたものが、この統一團であると信じて居ります。

斯様に考へますと、統一團の主義主張、抱負といふものは非常に大きなものでありまして、此の大きな抱負を實現せしむるには並大抵のことではない。各々小さい力の者は小さいなりに力を發揮し大きい力の者は大きいなりに力を發揮して奮勵努力するといふことが、吾々は日本民族として務むべき事であり、また統一團の創立者たる日生上人の御考に報ゆる所以であるところであるのでありませう、若しも私の申す事に御共鳴下さるならば、大きい力の人は大きい力を致され、小さい力の方は小さい力を盡されて、國の爲、道の爲に努力せられんことを切望する次第であります。(拍手)

これより横濱法悅協會の貝塚敏二郎氏や、小松川立正會館の小西日喜師、瀧野川本佛教會の和賀義見師、本團理事伊東竹三郎氏、淺草報恩閣の山口智光師、及び本會館常住の磯部滿事氏等に依つて各特色ある熱辯に時の過ぐるを覺えざる程であつた。併し司會者は定刻の來たことに就て更に次回を期して閉會の辭を結ばれた。

篤志の方々は七時から階上御寶前で、寒行會の殿修に参加し終つて、一步外に出ると明皎々たる寒月を浴びつゝ、微かな唱題の音が遠ざかつた。

新年の清淨な集會。そこには珍珠なくとも、芳醇な酒杯なくとも、心からなるお互に信の團合こそ又となく嬉しい、楽しい、餘韻の深いものである。

寄附團費誌料領收

(自昭和七年十二月廿一日  
至昭和八年一月廿一日)

一金貳圓也	千葉縣 富岡 こと殿	一金貳圓貳拾錢也	全	香瀬たけ子殿	一金貳圓貳拾錢也
一金六拾錢也	奈良縣 出口馬太郎殿	一金貳圓貳拾錢也	全	山室千枝子殿	一金貳圓貳拾錢也
一金貳圓貳拾錢也	大阪 鏡仁 典三殿	一金貳圓貳拾錢也	全	佐藤 五郎殿	一金壹圓貳拾錢也
一金壹百圓也	横濱 貝塚敏二郎殿	一金壹圓貳拾錢也	全	村松 菊野殿	一金貳圓貳拾錢也
一金貳圓五拾錢也	東京 長澤 知教殿	一金貳圓貳拾錢也	全	佐藤 愛子殿	一金貳圓貳拾錢也
一金壹圓也	全 岩瀬 たけ殿	一金壹圓貳拾錢也	全	石上 愛子殿	一金貳圓貳拾錢也
一金貳拾圓也	川崎 毛見 春吉殿	一金貳圓貳拾錢也	全	坂野千代子殿	一金貳圓貳拾錢也
一金貳圓也	横濱 箕輪嘉一郎殿	一金貳圓貳拾錢也	全	山玉 留男殿	一金貳圓貳拾錢也
一金貳圓貳拾錢也	東京 須賀輯之助殿	一金四拾壹錢也	全	大分 大石 千尋殿	一金貳圓貳拾錢也
一金貳圓貳拾錢也	大阪 福井治三郎殿	一金貳圓五拾錢也	全	山崎地明會殿	全
一金貳圓貳拾錢也	中津 有田 日蓮殿	一金四圓五拾錢也	全	小津 瑄殿	全
一金壹百圓也	東京 宮原 六郎殿	一金六圓也	全	東京 石井福次郎殿	全
一金拾圓也	全 宮原 やぶ殿	一金貳圓四拾錢也	全	松林 五郎殿	全
一金貳圓貳拾錢也	尼崎 植村藤次郎殿	一金貳圓四拾錢也	全	彌重 唐哉殿	全
一金貳圓也	東京 田中孝太郎殿	一金六圓九拾錢也	全	全 前	全
一金貳圓貳拾錢也	釋 眞賀殿	一金貳圓貳拾錢也	全	神谷てい子殿	全
一金七圓六拾錢也	小西 日喜師	一金五拾圓也	全	廣島縣 村上 信夫殿	全
一金貳圓貳拾錢也	山路 益三殿	一金貳圓也	全	南 有吉 市六殿	全
一金貳百圓也	笠間 信隆殿	一金拾壹圓八拾錢也	全	横濱 齊藤 勇吉殿	全
一金拾圓也	全 前	一金貳圓貳拾錢也	全	青森縣 鈴木 源八殿	全
一金五拾圓也	和賀 謙介殿	一金叁圓五拾錢也	全	大阪 蓮 成 寺殿	全
				兵庫縣 笹倉鹿太郎殿	全
				東京 菊地 雄三殿	全

右難有入帳仕候也  
財團法人 統一團會計  
新團員加盟

横濱市中區本牧町池田二一六六 箕輪嘉一郎殿  
神奈川県鎌原町二二八 佐藤 愛子殿  
東京市品川區南品川二ノ一八一 山室千枝子殿

前 荒川區日暮里元金杉一八四六 石井福次郎殿  
東京市京橋區新川一丁目八 須賀輯之助殿  
(磯部氏御紹介)  
(田中道爾氏御紹介)

東京市蒲田區志茂田四十 村松 菊野殿  
川崎市貝塚一六九 山田三五郎殿  
(毛見春吉氏御紹介)



松尾 清明 著  
海軍中將 佐藤鐵太郎閣下序文

國體本源論 一冊 二十五錢

京城帝國大學總長 山田三良博士序文

日本國と法華經の接觸 一冊 二十五錢

御送金は振替口座を御利用あれ  
千葉縣長生郡二宮本郷村

東天社  
振替口座東京三三五三三番

法華經講座開設

- 一、日時 每週木曜日 自午後七時(二月十六日)至九時(初講)
- 二、場所 小石川區音羽六丁目電停前統一會館
- 三、講師 文學士 小林一郎先生
- 一、聽講料 一ヶ月前納 金壹圓也  
一ヶ月同 金五圓也  
六ヶ月同 金八圓也  
一ヶ年同 金八圓也

主催 財團 統一會館  
電話牛込(34)五三三六番

(興法華經並開結の本都テ對引御願ヲ致マス)

本財團事務所移轉

今回新會館完成に依り主務官廳の認可を得左記の處に移轉仕候間乍畧儀以紙上御報知申上候

東京市小石川區音羽町六丁目十七番地

日蓮統一會館  
主義統一會館

財團法人 統一會館

求む

左記の書物をお譲り下さるお方は、乍恐縮下記へ御一報お願申上ます

元政上人 龍華歴代師承傳並傳鈔

横濱市鶴見區生麥町一七四七

貝塚 敏二郎

本多大僧正ノ左記著書

- 一、日蓮主義綱要
- 二、日蓮上人正傳
- 一、聖訓要義十卷

大阪市浪花區元町五丁目四九九

新見 辻平

謹告

兼て小石川區音羽町六丁目市電停留場前に建築中の本部會館今回工事落慶仕候に付來る二月十一日午後一時より開館式舉行仕候間御一同御誘合と御參列被成下度此段謹告仕候

昭和八年二月一日

財團 統一會館

統一會館		統一會館	
冊	冊	冊	冊
一冊	一冊	一冊	一冊
金貳拾錢	金壹圓貳拾錢	金貳拾錢	金壹圓貳拾錢
送料共	送料共	送料共	送料共
送料五厘	送料共	送料共	送料共
前金之	前金之	前金之	前金之

昭和八年一月廿四日印刷納本  
昭和八年二月一日發行 (第四百五十五號)

不許複製

編輯兼 發行所 東京市小石川區音羽町六丁目一七  
印刷人 磯部滿雄  
印刷所 東京市品川區南品川二丁目一八一  
電話高輪六〇二四番

發行所

財團法人統一會館

東京市小石川區音羽町六丁目一七  
電話牛込五三三六番  
振替東京九四二〇番



財團  
法人  
統一團本部開館紀念號

特  
輯  
號

第三十八年三月號

統

一

財團  
法人  
統一團發行